

マクラガイ *Oliva mustelina* Lamarck

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在、県内の干潟で生貝が確認されている場所はないが、一時的に底質環境が改善された干潟で生貝がごくわずかに採集された例がある(木村, 2005)。三河湾・伊勢湾の湾口部でも、潮間帯はおろか潮下帯からも死殻すらほとんど採集されない。内湾域の個体群の生息状況は非常に深刻である。ただし、渥美外海の潮下帯では底引き網漁業により継続的に生貝が採集されていて、年による変動も大きい。比較的多数の個体が採集される場合もあるので、直ちに絶滅する種ではないとは考えられるが、将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 35 mm、円筒形で殻表は強い光沢があり、平滑、殻質は非常に厚い。殻表は黄褐色の地色に濃褐色の不規則な波状の模様がある。螺塔は低く、体層は大きく、殻長のほとんどを占める。殻口は狭く、内唇は肥厚して白色。軟体部は大きく貝殻を被う。



蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、一時的に蒲郡市の人工干潟で生息が確認された(木村, 2005)が、最近では内湾域全域の干潟から潮下帯を含めた海域で生貝の採集記録はない。渥美外海の潮下帯の砂底からは底引き網漁業によって生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド太平洋に分布する。国内では房総半島から九州の内湾から外洋にかけて分布する。伊勢湾、瀬戸内海などの内湾域の干潟における本種の個体群は著しく減少した(木村, 2012)。渥美外海から土佐湾、新潟県以南の日本海の潮下帯では現在でも健全な個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾では外洋水の影響の強い砂泥底に生息している。外洋域では水深 10–50 m の砂泥底に生息している。生時に軟体部は殻をおおっているため、殻には付着物が無く、磨いたように平滑で光沢がある。肉食性で他の動物を丸呑みにする。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少については、マクラガイ科貝類は近年バイと近縁の種群であることが明らかにされていることから、船体塗料に含まれる有機スズによるインボセックスが要因の可能性がある。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

木村昭一, 2012. マクラガイ, p.73. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, 31.

【関連文献】

堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, (17): 283–288.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16–27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, 30.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)